第3章　書きかえられていないもの

前節では、グリム兄弟が時代に合わせて――とりわけ子どもに配慮して――昔話を書きかえたことについて考察してきた。しかしそれでもなお、グリム兄弟の『昔話集』の中には様々な話が収録されており、前章の書きかえを踏まえれば、書きかえられても不思議ではないようなものも収録されている。本節ではそういった特徴的な話のいくつかを見ておきたい。

前節で指摘したように、グリム兄弟は『昔話集』の改訂の際に、アルニムの助言を参考にしていた。しかし、アルニムの意見も全て取り入れられたわけではない。まずは、アルニムが子ども向きではないという指摘をしたにもかかわらず、『昔話集』に残された話がどのようなものであるのかを見ていく (アルニムの指摘に関しては、第2章第4節5を参照)。

第一にアルニムが残酷だと指摘した**「ねずの木の話」**(KHM 047) だが、その継母 (初出の初版より継母であった) は、継子の少年を憎み、殺してしまう。そして殺しの罪は実の娘に押しつけ、少年の肉でスープを作り、夫に食べさせている。それを夫はおいしく食べている。

このように、罪もない子どもが殺されて父親に食べられてしまうという残酷な内容であるため、アルニムが子ども向きでないと指摘した理由は容易に理解される。

次に**「漁夫とその妻の話」**(KHM 019) の漁夫は、ある時、ひらめを釣り上げる。ひらめは、自分は魔法にかけられた王子だと言って命乞いをする。漁夫は快く逃がしてやる。帰宅後、妻にこのことを報告すると、妻は、ひらめにお礼として小さな家を要求すれば良かったと言って夫をなじる。そうして漁夫は、再度ひらめのところに行き、ひらめに願い事を叶えてもらうのだが、この願い事は徐々にエスカレートしていく。妻は法王になっても満足出来ず、ついには神になりたいと願ったため、最後には元の小屋に戻されている。

この話も、人間の貪欲さがグロテスクに描かれているため、子ども向きではないとアルニムは考えたようだ。

さらに**「狐の奥さまの結婚式」**(KHM 038)[1]として収録されていた2つの短い話があった。第1話では、9本の尻尾をもつ年老いた狐が、妻の浮気を疑い、死んだふりをする。すると、求婚者が何人も現れる。夫の死を悲しむ狐の妻は、尻尾が9本ある狐とでなければ再婚しようとしない。最後に9本の尻尾を持つ狐がやって来たので、結婚することになるが、その時、死んだふりをしていた狐が動き出して皆を追い出してしまう。

第2話では、年老いた狐は実際に死んでしまう。すると求婚者としていろいろな動物がやって来る。未亡人 (狐) は、赤いズボンを履き、口がとがっている狐とでなければ再婚しようとしない。ついに若い狐がやって来て、結婚式を挙げる。

アルニムは明確には表現していないが、この話が性的な連想を呼ぶことを示唆していた (Steig 1904 S. 263)[2]。それに対して、ヴィルヘルムは、狐の尻尾については女性たちもそれ

---

[1] 第3版よりこの題である。それ以前は、「狐の奥さまの話」(Von der Frau Füchsin) であった。

[2] こうした性的な連想に関しては、ボティックハイマーが、9本の尻尾の持つ意味を端的に指摘している。「ヤーコプ・グリムは否定したが、ここには明らかに二重の意味がある。なぜなら、

を無垢に語るだろう (淫らな解釈はしないだろう) し、子どもたちも無邪気にそれを聞くだろう、しかしその他の人々が淫らな解釈をするだろうことは予測していたと応えている (Steig 1904 S. 267)。一方ヤーコプは、この話は全く純真な話だと主張する。そして、自分が子どもの頃にこの昔話を喜んで聞いたものだったとも記している (Steig 1904 S. 270f.)。アルニムは、この返事として 1813 年 2 月に書いた手紙で、ヤーコプが民間伝承を一概に純真なものと捉えていることに対し、民間伝承の多くが下品な冗談であることを想起させている (Steig 1904 S. 273)。

グリム兄弟は、「ラプンツェル」(KHM 012) においては性に関するものを慎重に書きかえておきながら、この話では、アルニムの指摘を受けつつも、変更・削除することはしなかったのである。

前章第 4 節で指摘した加筆に照らしてみれば、書きかえられていても不思議ではないものが、その他にもいくつも採用されている。以後は、前章第 4 節で指摘した観点に照らしつつ考察を進めていく。

第 1 節　道徳に関して

「小百姓」(KHM 061) において、小百姓は、計略により雌牛を手に入れ、この雌牛の皮が高く売れたといって村人を騙す。そのため、彼は死刑となり穴のあいた樽に入れて川に沈められることになる。しかし彼は、罪もない羊飼いを騙して、身代わりに死なせている。このように、これは騙しに騙しを重ねる話で、およそ道徳的とは思えない話であり、道徳が盛り込まれていった話とは好対照をなしている。

さらに、前章の書きかえの例からは、神を敬う敬虔な心を子どもに育もうとする意図が感じられる。ところが、敬虔でない主人公が登場する次のような話も『昔話集』には含まれているのである。

「賭博師ハンス」(KHM 082) の主人公のハンスも、負けず劣らずひどい男である。彼は賭博をやめることができず、ついには家までもすってしまう。家がとりあげられる期限の日に、神と聖ペテロがやって来て、一晩の宿を乞う。ハンスが食べ物はないというと、ペテロはパン代として、彼に 3 グロッシェンを渡す。しかしハンスは、このお金も賭博ですってしまう。さらには、そのお金を水溜りに落としたふりをして、ふたりを騙そうとする。それでも神は、立ち去る際に 3 つの願い事を叶えてやろうと申し出る。天国に行くことを願うだろうという神の期待をよそに、ハンスは「必ず勝てるトランプ」「必ず勝てるさいころ」「あらゆる種類の果物がなる木で、その木に登った者はハンスが許可するまで降りられないもの」を願う。この願いは全部叶えられる。ハンスはこの必勝グッズを用いて賭けに勝ち続ける。それを見て青ざめた神とペテロは、ハンスのもとに死神を送る。しかし死神は、ハンスが許可するまで降りられなくなる木に登ってしまい、7 年の間降ろしてもらえなかったため、その間には人間がひとりも死ななかった、という話なのである。

今日的な感覚から見ても、賭博にふけることは「悪行」といえる[1]。『昔話集』の時代に

ドイツ語の「尻尾」(Schwanz) には陰茎の意味もあるからだ」(Bottigheimer 1987 S. 160)。

[1] 小澤も「悪行」として扱っている (小澤 1992 S. 81)。

も同様であったことは、ハウフ (Wilhelm Hauff, 1802-27 年)[1]の昔話からも窺い知ることが出来る。『昔話年鑑』(『シュペッサルトの宿屋』, 1828 年刊行) の「鹿の銀貨の伝説」においては、さいころ (ダイス) 賭博が罪なこととして扱われている (Hauff 1969 Bd. 2 S. 210)。この「鹿の銀貨の伝説」は、領主の 3 人の息子——長男のクーノ、腹違いの双子の弟シャルクとヴォルフ——の話である。クーノは自分が相続した池を仲良く 3 人で所有しようと申し出るが、弟ふたりは、誰かひとりの所有物にしないでは気がすまない。そこでヴォルフはダイスで持ち主を決めようと言い出すのである。

> 「ダイスはやらないんだ」
> とクーノは応えた。弟たちの強情さを悲しく思いながら。
> 「まあ、そうだろうなあ」
> とシャルクが笑った。
> **「兄さんは敬虔で信心深いから、ダイス賭博は大罪だと思っているんだ。**なら、僕は別の方法を提案するよ。これなら、どんな隠修士だって恥じることはないよ。釣り糸と釣り針をもってきて、(ホーエン) ツォレルンの鐘が 12 時を打つまでに一番多くの魚を釣った者が、この池の持ち主になるんだ」(Hauff 1969 Bd. 2 S. 210)。

このようにダイスが罪なこととして扱われていたのには歴史的な背景がある。教会がそれを禁じてきたのである。阿部によれば、そもそも中世都市の人々の生活の中では、「チェスやダイスの遊び、トランプカード遊びなどは大変大きな位置を占めて」いたという (阿部 1981 S. 271)。ところが、チェス、ダイス、トランプには賭がつきものだったため、時として大きな問題となった。そのためトランプは、ニュルンベルク、アウクスブルク、ウルムなどで 14 世紀末には禁じられており、フランクフルトでは 1452 年に禁止されたという。一方ダイスは、既に 952 年に、ダイス遊びをやめない聖職者を罷免するとオットー大帝が命じている。そして「ダイス遊びと結びついていた賭博に対する禁令は、諸都市の法令のなかにしばしば登場」するのである (阿部 1981 S. 271ff.)。

それに対して、グリム兄弟の「賭博師ハンス」(KHM 082) は笑話であるとはいえ、昔話の中では、善悪の価値判断に基づいた言及は一切なされていない[2]。また筋の上で、最後に厳しく罰せられているわけでもない。こうしたことからは、グリム兄弟はどうやら昔話を教訓色に染め上げることを至上の課題としていたのではなかったことが推察される (昔話の中の道徳性に関しては、本論第Ⅲ部にて同時代の昔話と比較も行う)。

加筆によってますます敬虔にされていった主人公たちを尻目に、敬虔でもまじめでもな

---

[1] グリムと同時代に創作昔話集を刊行した。詳しくは本論第Ⅲ部で扱う。

[2] 子どもに与える教訓的な話に仕立て上げようとするならば、「ハンスは敬虔でないからそういう願いをしたのです」などという言葉が付け加えられていたとしても、不思議ではないだろう。また、『昔話集』の中には、ハンスとは対照的に、真っ先に天国に行くことを望む貧乏だが敬虔な夫婦の話 (「貧乏人と金持ち」KHM 087) もある。彼らは「生きている間は健康でいられて、必要なだけのパンが毎日ありますように。3 つ目は何を願ったらよいのか分かりません」(Grimm 1980 Bd. 2 S. 14) という模範的な答えをしているのである。

い主人公が登場する昔話も『昔話集』にはいくつも掲載されているのである[1]。

第2節　性に関して

グリム兄弟は、批判を受けたこともあって性にまつわる事柄を『昔話集』から消していったことは、前章で指摘した通りである。そしてグリム兄弟が**「ラプンツェル」**(KHM 012)を書きかえたことについては、ボティックハイマーは次のように述べている[2]。

> 学者よりも子どもを読者と考えるようになったグリム兄弟が、読者のために洗い清めたのだ (Bottigheimer 1987 S. 157)。

当時は、昔話が子ども向けのものになっていった時代でもあり、こうした配慮はグリム兄弟に限らず、広く行われていたものである。ベヒシュタインらの同時代人に関しては第Ⅲ部で詳しく考察することになる。

それでもグリム兄弟が、例えばアルニムの指摘を受けた「狐の奥さまの結婚式」(KHM 038) をそのまま残していること、さらに、次節で紹介するような「不倫」の話でさえも、『昔話集』には掲載されていることに、この関連でも注目できる。

第3節　愛情に関して

親子間の酷い行為

前節では、親子間の愛情を美化するような加筆が行われていたことを指摘した。ところが、『昔話集』には、親子間の酷い行為が語られた昔話も存在する。

思わぬ約束から、子どもを渡すことになってしまう親は、昔話にはときおり登場するが[3]、**「ラプンツェル」**(KHM012) においては、魔女に脅されたからとはいえ、父親がそれを承知の上で子どもを渡す約束をしている。

また**「忠臣ヨハネス」**(KHM 006) にも、恐ろしい場面がある。忠臣ヨハネスは、王と妃を危険から救うために命をかけ、体が石となってしまう。数年後に、この石像が口をきき、王が自らの手でふたりの王子の首をはねて、その血を塗ってくれれば、自分は生き返ることが出来ると言うのである。王はヨハネスの忠義を思いやり、なんとそれを実行に移しているのである。

---

[1] その他、「のんきもの」(KHM 081) の主人公も、相手が聖ペテロだと知らないとはいえ、嘘をつき、不敬な態度をとっている。また、「泥棒の名人」(KHM 192) においては、名人は、教会から司祭と下働きを盗み出すことに成功している。

[2] さらに、Tatar 1987 S. 10 その他にも言及がある。

[3] 例えば、「鳴きながら跳ねるひばり」(KHM 088) では、ライオンから逃れるために、家で最初に出会うものを渡すという約束をする。そうして末の娘がライオンに引き渡される。「金の山の王様」(KHM 092) においても、商人は、家で初めに足にぶつかったものを与える約束をするが、それは息子となる。

夫婦間の酷い行為

同じことは、夫婦関係についても言える。前章では、夫婦や恋人の間の愛情が情緒化された書きかえを取り上げたが、ここでは、そうした傾向にそぐわない話を見てみたい。

これに関しては、『昔話集』の中の「忠実と不実」に関する考察を行ったゾルムスの指摘が示唆的である。

> 兄弟姉妹の間、また主人と従者の間、人間と動物の間柄においては、忠実さが賞賛されている。そして、忠実さといえば今日の読者が最も期待するであろう夫婦間や恋人間においては、不実が訴えられているのである (Solms 1999 S. 18)。

この指摘の通り、グリム兄弟の『昔話集』には、当時の理想であった調和のとれた夫婦・恋人像には全くそぐわない状況が描かれていることが少なくないのだ。

「本当の花嫁」(KHM 186) においては、王子が花嫁のことをすっかり忘れてしまい、別の王女と結婚することになっている。その他の昔話においても、男が婚約者を忘れ、別の女性と結婚してしまうか、もしくは婚約してしまうことはしばしば起きている。

さらには、不倫の試みさえも語られることがある。

「ヒルデブラントじいさん」(KHM 095) の司祭は、一度でよいから好きな農婦と一日中ふたりきりで楽しく過ごしたいと思っている。それで、農婦に入れ知恵をする。農婦は病気のふりをし、日曜になると、夫に代わりに説教を聞いてくるように頼む。司祭は、病気の家族がいる者はイタリアのゲッケルリ山へ巡礼に行くように勧める。何も知らない夫は、巡礼に出かけてしまう。

これは明らかに、不倫を試みる話である。この試みは失敗するとはいえ、およそ子ども向きのテーマではないだろう。また、夫婦間の美しい愛情という観点からも好ましくないものである。

同様の不倫の試みは、**「小百姓」**(KHM 061) においても行われている。ここでも司祭は、粉屋が留守の間を狙って訪問している。ふたりは盛大なごちそうとワインで楽しもうとする。そこに思いがけず夫が帰宅するため、妻は、司祭とごちそうを慌てて隠すのである。

どちらの話においても、結局のところ計画は失敗しているのであるが、こうした不倫や嘘が『昔話集』から取り除かれなかったことは注目に値する[1]。

第４節　残酷さに関して

既に考察したように、親が安心して子どもに渡すことが出来るように、昔話の残酷な箇所はグリム兄弟の『昔話集』においてもやわらげられていったのであるが、それにもかかわらず、『昔話集』の中にはまだまだ残酷なところが残されている。

「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) の魔女は、ヘンゼルを太らせて煮て、グレーテル

---

[1] 「小百姓」(KHM 061) には、既に言及したように「嘘」もあれば、残酷なところもあり、どう見ても道徳的な話ではない。小澤は「道徳的にいえば、これはとても承認しえない内容です」(小澤 1992 S. 82) と指摘している。

をパン焼きがまで丸焼きにして食べようと考えている。また**「みつけ鳥」**(KHM 051) の年とった料理女も、少年を煮て食べようとしている。どちらの子どもたちも結局のところは食べられずに助かるとはいえ、子どもを食べるという残酷な行為が語られている。

「トルーデおばさん」(KHM 043) の少女は、トルーデおばさんの噂を聞きつけ、その家に行きたくなり、親が止めるのも聞かずに出かけていく。そこで少女は、トルーデおばさん (魔女) によって丸太に変えられ、火の中に放り込まれてしまう。

前章で指摘した通り、「名づけ親さん」(KHM 042) においては、名づけ親の本当の姿 (角を生やした悪魔) を見た男は、第 3 版からは命が助かることになっており、残酷な結末が回避されていた。同様に「トルーデおばさん」(KHM 043) においても、少女を燃やすのではなく、教訓を付けるなり、別の罰を与えるなりの変更を行うことも可能なはずである。ところがここでは悲劇的な結末が保たれているのである。

さらに、**「乞食のお婆さん」**(KHM 150) は、何の罪もないお婆さんの服に火が燃え移ってしまう話である。火のもとにいた若者にはそれが見えたのだから、若者は火を消すべきだったのに、ということだけが語られる、短い不思議な話である。

また、**「蛇の話」**(KHM 105) の第 1 話は、幼子のところに蛇がやってきて一緒にミルクを飲む話である。ある時、ミルクに入っているパンを蛇が食べないので、その子は、パンも食べろと言いながら蛇の頭をスプーンで軽く叩く。それを見た母親は、蛇を打ち殺してしまう。その時から子どもは元気を失い、じきに死んでしまう。こうして何の罪もない子どもが死んでしまうのも、簡単に回避出来る残酷さのように思える。

「きょうかたびら」(KHM 109) では、7 歳の愛らしい男児が、突然病気になって死んでしまう。母親は、夜も昼も泣き通す。すると夜にその子が現れ、母親の涙がきょうかたびらを濡らし、乾かなくて重いので、泣くのをやめてほしいと頼む話である。これもまた、罪のない子どもが死んでしまうかわいそうな話である。

「7 羽の烏」(KHM 025) では、冒頭で待望の女の子が誕生している。父親は、息子に洗礼の水を取りに行かせる。なかなか帰ってこない息子たちを父親が呪ったため、息子は 7 人とも烏になってしまう。やがて成長した少女は、自分のせいで烏になった兄たちを助けるために家を出る。途中、ガラスの山を開けるために必要なひよこの骨をもらうが、少女はそれを失くしてしまう。そのため娘は自分の小指を切り落として、ガラスの山の門を開けるのである。むろん、その描写には残酷趣味的な関心は見られないとはいえ[1]、これも回避可能な残酷さのように見える。なぜなら指を切るという行為は、後の筋とは全くかかわりがないため、別の方法で門を開けることにすることは、容易だからである。

「3 枚の蛇の葉」(KHM 016) は、前章でも言及したように、自分が先に死んだときには、生きたまま一緒にお墓に入る人しか夫にしないと誓う王女の話であった。第 3 版より「私

---

[1] 「7 羽の烏の妹が、ガラスの山の門を開けるために自分の小指を切り落とす際には、彼女の心の葛藤については何も語られず、血も流れない。彼女がその後ずっと指がないままだというふうにも考えない。切り落とす時と、その後に感じる痛みに関しても一言も語られないのである。筋だけが語られ、心については描写されない (Lüthi 1989 S. 33)」。「(この少女には) 迷いもなければ、自己との闘いもない。さらに苦痛の声もしなければ、血が流れることもないのである。ましてや体に傷がつくこともない。まるで紙人形の指が切り取られたかのようなのだ」(Lüthi 1989 S. 49)。

を心から愛している人なら、生きていて何の意味があるでしょう」という王女の言葉が付け加えられ、その行為の残酷さが少し弱められていた。しかし、夫を一緒に生き埋めにするという残酷なところは残されたままであり、後に夫はともに生き埋めにされているのである。

「12 人の兄弟」(KHM 009) の妹は、自分のせいで鳥になってしまった 12 人の兄たちを助けるため、7 年間口をきくことも笑うことも出来ない。やがて娘は、王と結婚するが、王の母親の反感を買う。この義母は妃にいろいろな罪をなすりつけたため、妃は死刑となる。すんでのところで妃は助かるが、この「悪い義母は裁判にかけられ、煮えたぎった油と毒蛇が入った樽に入れられて、ひどい死に方を」する。これは 1810 年手稿の段階から義母に下されている罰で、最終版まで引き継がれたものである。罰の描写は、上記の引用のみであり、義母の苦しみなどは一切描写されず、残酷趣味には傾いていない。さらに、野村が指摘しているように「本当らしくない」(野村 1991a S. 37) という側面もある[1]。リアルな残酷さではないのだが、グリム兄弟の昔話にはこのように残酷な罰もしばしば登場するのである (悪者に対する厳しい罰に関しては、第Ⅲ部でその他の昔話との比較考察をする)。

これらの話における残酷さは、前章における残酷さを弱める書きかえとは、相容れないように思える。

本章で指摘してきたようなものを、グリム兄弟が書きかえずに残しているのはなぜなのだろうか。それらが書きかえられずにいることには、グリム兄弟の昔話観が深くかかわっていると思われる。次節で、グリム兄弟の昔話観を考察していく。

第 5 節　神話へのまなざし

さて、ここでは少し趣を変え、グリム兄弟の代表的な昔話である「赤ずきん」(KHM 026) や「白雪姫」(KHM 053) とは全く異なる話を見てみたい。「下男」(KHM 140) という話で、短い話であるので、全文を掲載する。

> 「あんたはどこに行くの？」
> 「ヴァルペだよ。」
> 「私はヴァルペに行く、あんたはヴァルペに行く。それじゃ、一緒に、一緒に行こう。」
> 「あんたにも夫はいるの？夫はなんて名前なの？」
> 「カーム。」
> 「私の夫はカーム、あんたの夫はカーム。私はヴァルペに行く、あんたはヴァルペに行く。それじゃ、一緒に、一緒に行こう。」
> 「あんたにも子どもはいるの？その子はなんて名前なの？」

[1] つまり「油が煮え立っていたら、毒蛇も生きてはいない」(野村 1991a S. 38) からである。

「グリント (Grind)[1]。」

「私の子どもはグリント、あんたの子どもはグリント。私の夫はカーム、あんたの夫はカーム。私はヴァルペに行く、あんたはヴァルペに行く。それじゃ、一緒に、一緒に行こう。」

「あんたもゆりかご持ってるの？ゆりかごはなんて名前なの？」

「ヒッポダイゲ。」

「私のゆりかごはヒッポダイゲ、あんたのゆりかごはヒッポダイゲ。私の子どもはグリント、あんたの子どもはグリント。私の夫はカーム、あんたの夫はカーム。私はヴァルペに行く、あんたはヴァルペに行く。それじゃ、一緒に、一緒に行こう。」

「あんたのところにも下男はいるの？下男はなんて名前なの？」

「マッハミアスレヒト (Machmirsrecht)[2]。」

「私の下男はマッハミアスレヒト、あんたの下男はマッハミアスレヒト。私のゆりかごはヒッポダイゲ、あんたのゆりかごはヒッポダイゲ。私の子どもはグリント、あんたの子どもはグリント。私の夫はカーム、あんたの夫はカーム。私はヴァルペに行く、あんたはヴァルペに行く。それじゃ、一緒に、一緒に行こう」(Grimm 1980 Bd. 2 S. 246)。

リズミカルで、徐々に長く連なっていくフレーズが楽しい話ではあるが、「赤ずきん」(KHM 026) や「白雪姫」(KHM 053) のようないわゆる昔話らしさはない話である。グリム兄弟がこの話をなぜ『昔話集』に採用したのかということの鍵は、『昔話集 注釈篇』(第3巻) に示されている。

そこでは、この昔話の中に出てくる名前が、ある神話とよく似ていることが指摘されているのである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 235ff.)。グリム兄弟が取り上げているのは、北欧神話であるスノリの『エッダ』[3]の以下の記述である。

彼女の館はエーリューズニルといい、彼女の皿はフング (空腹)、ナイフはスルト (飢え)、下男はガングラティ、下女はガングレト、入り口の敷居はファランダ・フォラズ (落下の危険)、ベッドはケル (病床)、ベッドのカーテンはブリーキンダ・ベル (輝く災い) という名なのだ (谷口 1973 S. 249)。

これは、ヘルの住まいに関する記述である。ヘルというのはロキ[4]の子で、オーディンによってニヴルヘイムに投げ込まれた者である。病気で死んだ者や寿命が尽きて死んだ者は、

---

[1] 「かさぶた」という意味の言葉である。

[2] 「ちゃんとやれ」(野村訳による, グリム 1999f. 第六巻 S. 74) という意味である。

[3] 『エッダ』は、北ゲルマン人の間に伝わる神話や英雄伝説で、韻文の歌謡の形で伝わっているものである。詳しくは本論第II部で扱う。

[4] ロキは巨人の子だが、オーディンと血盟兄弟であるため、アース神族と見なされる。トリックスターの要素を持ち、アース神を困難に陥れることもあれば、危機から救ったり宝物をもたらしたりする。フェンリル、ヨルムガンド、ヘルを生み出した。「神々の黄昏」でロキはヘイムダル神と戦い、どちらも相討ちとなる。

ヘルのところに来て、そこで住まいが割り当てられるのだ (戦死者はオーディンのもとに行く)。「下男」の中に登場する名前を、グリム兄弟は上記の神話に登場する名前と関連づけていたのである。

「下男」はハクストハウゼン家から入手し、『昔話集』の初版第2巻 (1815年) より採用された話である。グリム兄弟は1815年に『エッダ』の一部を翻訳しているため、その頃には既に『エッダ』に関する造詣は深かったと考えられる。そうした知的基盤のもと彼らは、昔話の中に上記のような神話的要素を見出し、初版の段階から、注釈の中で指摘していたのである。

さて、グリム兄弟は、『昔話集』でその名を知られているが、彼らが研究したテーマやジャンルが多岐にわたっているということは、既に述べた通りである。デーネッケ／ケミングハウゼンによれば、短い論文を含めたタイトルの数はヤーコプが 487、ヴィルヘルムは 224 である。単独で公刊された本の数は、ヤーコプが 20、ヴィルヘルムが 9、共同で 11 だという (Denecke/Kemminghausen 1963 S. 30)[1]。ここでその中の主な著作のタイトルを見てみよう。

ヤーコプの主著には、『古代ドイツの職匠歌について』(1811 年)、『ドイツ文法』(1819-37 年)、『ドイツ法古事誌』(1828 年)、『ドイツ神話学』(1835 年)、『古判例集』(1840-78 年)[2]がある。ヴィルヘルムの主著は、『古代デンマークの英雄歌、バラード、昔話』(1811 年)[3]、『ドイツのルーネ文字について』(1821 年)、『ルーネ文字の文学について』(1828 年)、『ドイツ英雄伝説』(1829 年) である。加えて共著として、『昔話集』の他、『8 世紀のドイツ最古の二篇の詩』(1812 年)、『哀れなハインリヒ』(1815 年)、『古エッダの歌』(1815 年)、『ドイツ伝説集』(1816-18 年)、『ドイツ語辞典』(1852-62 年) などがある[4]。中でもヤーコプの『ドイツ文法』、『ドイツ法古事誌』、『ドイツ神話学』(以下『神話学』と略す) など、どれも大部であり、タイトル数に表れている以上にヤーコプは大量に執筆していたのである。

そもそもヤーコプが 1802 年より、ヴィルヘルムが 1803 年よりマールブルク大学で学び始めたのは法学であった。そこで法学教授のサヴィニーに出会い、その講義や方法論に刺戟を受けただけでなく、彼の書斎でボードマーやティークによる中世ドイツのミンネ歌謡を知り、深く感銘を受けたことが、以後の彼らの研究をドイツ古代のもの全般に向かわせ

---

[1] 『小論集』に掲載されている著作目録を数えなおした谷口によれば、ヴィルヘルムの公刊は 15、共同執筆は 8 だという。

[2] 『古判例集』は、全 7 巻より成るが、第 5 巻以降はヤーコプの没後に刊行された。

[3] これに関しては、第Ⅱ部で扱う。

[4] 現在刊行中の Ludwig Erich Schmitt によるグリム全集 (Georg Olms Verlag) がある。第Ⅰ部がヤーコプの著作で、第 1-8 巻が『小論集』、第 9-14 巻が『ドイツ文法』、第 15-16 巻が『ドイツ語史』、第 17-18 巻が『ドイツ法故事誌』、第 19-25 巻が『古判例集』、第 26-28 巻が『ドイツ神話学』、第 29 巻が『古いドイツの職匠詩について』、第 30 巻が『狐ラインハルト』である。第Ⅱ部がヴィルヘルムの著作で、第 31-35 巻が『小論集』、第 36 巻が『ドイツ英雄伝説』である。第Ⅲ部が共著で、第 37-39 巻が『古いドイツの森』、第 40-43 巻が『ドイツ語辞典』、第 44-45 巻が『昔話集』、第 46-47 巻が『ドイツ伝説集』、第 48 巻が『古いエッダの歌』である。加えて第Ⅳ部には書簡集、第Ⅴ部にはボルテ／ポリフカの注釈集などグリム研究の主著が収められる。

る契機になったのである[1]。

先に挙げたように、グリム兄弟の著作は、昔話から、詩、文法、法律まで多岐にわたっているが、しかしグリム兄弟にとっては、それらはみな「民族の初期の段階に同一の源から生じた」(J. Grimm 1965a Bd. 1 S. 400) ものであり、互いに関連しあうものであった。そのことをヤーコプはこう述べている。

> 一つの源から生じたものは、いつでも互いに親縁関係をもち、互いに入り組んでいる。[...] 今日の学問はあらゆるものをこと細かに分けるのが常だが、私たちの祖先は何も分けることなく、全てを、十分な根拠に基づき享受していた (J. Grimm 1965a Bd. 6 S. 154)。

彼らは、昔話もそうした枠組みの中で捉えていたのである。そして昔話の中に、特に神話とのつながりを見出していたのである。

> 昔話の中には、失われてしまったものとみなされている、生粋のドイツの神話があるのです (Grimm 1986 Bd. 2 S. VIIf.)。(『昔話集』初版序文)

> これらの伝承の学問的な価値は、**いにしえの神話との、多くの驚くべき親縁関係**の中に保持されてきました。そしてドイツの神話学では、この関係についてのテーマにたちもどる機会が何度もありました。ドイツの神話は北欧神話との一致をみせ、源がつながっていたことの証拠をそこに見出したのです (Grimm 1985 1 S. 22)。(『昔話集』第 3 版序文)

ドイツでは比較的早い段階にキリスト教への改宗が行われたために、既に神話は失われてしまったものと考えられていた。しかし、北欧に残るゲルマン神話の『エッダ』を研究し、翻訳出版していたグリム兄弟は、収集した昔話の中に北欧神話との類似点を発見しており、ドイツの神話が完全に失われてしまったのではなく、昔話として生きながらえていることを確信していたようだ。逆に言えば、『昔話集』を集めることによって、ドイツの神話を人々に呈示しようとしたのだった。彼らが昔話を集め始めた頃のドイツはナポレオンの制圧下にあり、そうした中で古代ドイツのものは、彼らにとって精神的な支えともなるものであったのである[2]。

そして、前節で指摘してきたような疑問点を考える上で、このようなグリム兄弟の「昔話—神話観」が非常に重要な鍵となってくるのである。

グリム兄弟が昔話を神話の残滓と考えていたことは、これまでも指摘されることはあっ

---

[1] ヤーコプの「自叙伝」によれば、感銘を受けた書物とは、ボードマー版のドイツミンネ歌謡、ティークの『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』およびその序文だった (Denecke 1985 S. 20)。

[2] 1849 年に、ヤーコプは当時のことを次のように振り返っている。「我々の学問、獲得された文学、言語と詩文芸に対するたゆむことなき感情、これらこそが、ドイツにおける最も厳しい苦難と無力のどん底の時期に、民族を力づけ、内より奮い立たせたものであり [...] 我々を没落から守ったものである」(Denecke 1984 S. 14)。

た。例えば「いばら姫」(KHM 050) と北欧神話のブリュンヒルドを結びつける言及は、折々なされている。しかしグリム兄弟が、具体的に昔話のどういったところに「神話」を見出しており、そうした神話観が「書きかえられたもの」、「書きかえられていないもの」にどのように影響しているかということはいまだ十分には考察されていない。

「下男」(KHM 140) の例で示した通り、グリム兄弟は、昔話の中に見出した「神話」との関連を、『昔話集 注釈篇』や『神話学』に具体的にそれに基づいて示しているのである。次章では、そうした資料をもとに、「昔話—神話観」を具体的に考察することで、グリム兄弟の「書きかえられたもの」、「書きかえられていないもの」を考えていく。

グリム兄弟の弟ルートヴィヒによる『昔話集』の扉絵